

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 有賀 ゆうアニース

有賀ゆうアニース氏の研究「多人種／人種の社会的意味——戦後日本における「混血児問題」の歴史・社会学的記述——」は、1940年代後半から1960年代にかけての日本における「混血児問題」の経過を、エスノメソドロジーおよび概念分析の観点から分析し、「混血児」たちの経験の可能性がどのような社会的歴史的条件によって規定されてきたのかを明らかにするものである。

第1章では、まず、多人種者という論題、すなわち「別個の人種を構成していると信じられている2つ以上の集団の子孫」に関する先行研究のレビューを行い、現代日本社会の原点とも言える時代に多人種者が最も社会的争点として顕在化した事例として「混血児問題」を位置づけたうえで、「混血児問題」に関する先行研究において、「混血児」をめぐる概念の局所的偶発性と歴史的規定性とは見落とされている点を指摘する。それを踏まえ、当事者たちの概念の実際の用法を局所的な活動・場面や歴史的な過程・文脈に即して観察することで、「混血児」たちの経験の可能性がどのような社会的歴史的条件によって規定されてきたのかを明らかにするという研究の方向性を打ち出している。2章では、そうした研究目的を達成するための調査・分析方針として、エスノメソドロジー、歴史的存在論の視点を参照し、当事者たち自身の局所的状況に応じた概念の用法・連関とその歴史的規定性の変異の分析という一般方針、またそれから派生する本研究の資料収集・分析の具体的手順を設定する。

以上の2つの章で準備された分析アプローチをもとに、1940年代後半から1960年代にかけての日本における「混血児問題」の経過を分析したのが、第3章から第6章にかけての各章である。

第3章では、占領期初期（1945-46年）および「混血児」の誕生の直前という歴史的文脈における「混血（児）」をめぐる民衆や政府の活動を検討している。1945年の敗戦直後の時期における民衆流言の分析をつうじて、人種・性別・国家・人格といったカテゴリーに結びついた知識や規範、特にカテゴリー的序列や内婚規範を参照することで、「混血児」の誕生や「混血児」の母の出現を問題として理解することが可能になっていたことが明らかとなる。続く第4章では、「混血児」の出生後・占領期の長期化という歴史的文脈のなかで「混血児」をめぐる概念連関がどのように機能してきたのかを検討し、「混血児」の妊娠出産を経験した実母たちの我が子の養育に関する選択が、第3章でみた日

本側の概念連関だけでなく、アメリカ側の内婚規範にもとづく制度的環境によって規定され、「混血児」の非嫡出子や孤児の偏頗という状況が現出したこと、また「児童／子どもとしての混血児」および「孤児／要保護児童としての混血児」という知識を前提として、「混血児」が児童福祉行政の対象として措定されていた経緯があきらかにされる。

第5章では、占領期の終了と「混血児」の学齢期への接近という2つの契機により、「混血児問題」をめぐる議論が多方面で沸騰していく経過に焦点を当て、「混血児」が学齢期直前となる時期における「混血児問題」をめぐる政策形成過程を解明している。続く第6章では、「混血児」が学齢期（やその後の青壮年期）に移行する時期における政策の運用過程、そしてそれが「混血児」たちにもたらした帰結に照準し議論を展開している。第7章では以上の知見を踏まえ、研究の初発の問いに対し、「混血児」カテゴリー、あるいはより広く人種カテゴリーに結びついた概念連関をつうじて「混血児」を対象とした社会統制が遂行されてきたということ、そして人種にとどまらない多様な種類のカテゴリーを包含したその概念連関が累積的かつ複合的に「混血児」の経験の可能性を条件づけてきた、という答えを与えている。

以上の経験的分析にもとづく本論の理論的意義として以下のような点を挙げることができる。

(1) 先行研究が前提としてきた多人種性や人種的境界への志向そのものが、歴史的かつ局所的に組織され、人種的マイノリティの経験を規定してきたことを解明した点、

(2) 一般に人種的境界とは無縁と想定されてきた現代日本社会の制度的編成との関連において人種的境界が一貫して作動することによって「混血児」たちの経験が形成されてきたことを解明した点、

(3) 類似した文脈を共有する他国との比較によって日本における多人種者の位置の一般性と特異性を同時に解明した点、

(4) 差別の基準や意味を研究者が前もって用意するかわりにその理解可能性の条件・基準とそうした条件依存的理解の社会的帰結を記述するという代替的分析方針を提示した点

口述審査においては、このような経験的・理論的な知見について総じて高い評価が与えられる一方で、本論文が提示した具体的分析をもとに、より強い形で理論的主張もなしえたのではないかと（たとえば「戦後日本社会」と「混血児」の「成長過程」の重なり合いが持つ社会学的な意義についての考察など）、「差別がある」ことの条件措定と「差別がない（とされる）こと」の条件措定とを分節しうる本論文の方法的射程からしたとき、先行研究で提示される「差別の不可視化」論との差異をより明確な形で提示することも可能だったのでは

ないか、「混血（児）」をめぐる歴史資料をアメリカ側の観点から再構成・解釈したとき、占領サイドのまなざしの揺らぎや相克などを丁寧に描き出すこともできるのではないか、呈示されている「歴史・社会学」がいわゆる「歴史社会学」とは異なる水準で問題を解明しうる理論的可能性についてもう少し明らかにできるのではないか、「混血（児）」問題ということで取り上げるべき人物が他にもいたのではないか（あえて取り上げなかったとすればその選別原理は何か）、自らが採用している方法論——行為の理解可能性／リソースの歴史的規定性の双方向から対象にアプローチする方法論——の固有性、他の方法との理論的な差分をより明確化したほうがよいのではないか、などの質疑がなされたが、いずれに対しても的確な回答を提示しており、十分な洞察力と学識を確認することができた。合議の結果、審査員の総意として、本論文が博士（社会情報学）の学位請求論文として合格と認められるとの判断に至った。